２０２４年度奨学生総評

小島なお

●清水　将也さん

僕たちの時価総額が落ちていく
優しい先輩ばかりの国で

●西野　奏子さん

敬礼をしてよ等しく凍蝶へ

●小池　弘実さん

まだ誰も彼もが
生きているような気のする
午後の葉桜の前

●大嶋　碧月さん

俺は光よりも速く産道を泳いで
サリンの朝から逃げてきたんだ

自分がここに居るという事実だけでは、現在地をはかることはできません。作者がどういう種類の物差しをもって今に立脚しているのかを知りたい。ここにあげた作品はいずれも時代や社会を見据える眼差しによって、自分という存在の輪郭を確かめなおすようです。戦争や地下鉄サリン事件など時代に落ちた翳りの歴史の先に自分たちの生きる権利があるということ。ページ上の史実をなぞるのではなく、当事者ではない立場からどう史実を、過去を引き受けるかという問いへ向き合う姿勢と言葉に打たれました。

●奥村　俊哉さん

斧を振るねばつく斧を振る

●吉冨　快斗さん

女のみ肌を失う冬の星

●塩田　きよらさん
ずくずくだよ、パジャマ
わたしが言うはずの言葉を
花に奪われてから

●小宮　颯人さん
悲しみが染み付いている家にある
ペットボトルのボウリング場

●金光　舞さん
春が来る訳じゃない
散るばんなの

蝉がなき　本がつぶれ
雪がきえてしまって

　これらの作品は濃く淡く被害／加害の意識に貫かれているような葛藤や戸惑いの揺れがあります。斧のねばつく感触には加害者側に立ちうる自身の葛藤や、加害性の奥底に横たわる被害者意識へと手を届かせようという意図を感じます。加害と被害の構図は、人類史レベルの遙かなものから、ジェンダーや経済格差、花言葉のささやかな美意識の世界にまで行き渡っている。その事実に自覚的になるほどに、私たちにはできるだけ多くの言葉が必要なのだと実感します。

●佐久本　倫歌さん
遺伝子の海辺
いなくなったあと
寂しくないようしおりを投げる

●小笠原　風花さん
冷たさをどうして青と思うのか
高額当せんのせんはひらがな

●渡邉 美愛さん
よざくらの発光
じょじょに淡くなり
きみの眼窩のみずぎわを　押す

美しいものや移ろうもの。微細な心の感動を書き留めるのが詩の大きな役割です。いちど過ぎてしまえば再びは現れない人やものや瞬間や感覚。世界は変わり、自身はもっと変わってゆく。それでも自分を今につなぎ止める直感をよすがに世界を掴んでゆく作品群です。喪失の気配にしおりを挟むのではなく「投げる」のは自分が覚えておくことよりも、そののちを生きる誰かにはじめて見つけてもらうためだろう。宝くじ売り場にも、きみの目にも日常と非日常のきりぎしが深淵をのぞかせていて、目を凝らせばいつでもそれを見つけることができるのだと信じさせてくれます。

●松下 誠一さん
鼓笛隊だから両手で食べる雪

●中矢 温さん
夢くらい十一月の長い犬

●吉沢 美香さん
猫背なら動かせるかも秋の虹

●杉原 健吾さん
ぽーんぷゆ
めってめけいてめけもれば
うたは
あなたによまれているよ

詩だからこそできる遊戯がここにはあります。道理の通らないこと、倫理の壊れている関係、意味を捨て音のみをひびかせる試み。目的を持つのが社会的な言語であれば、目的を持たない言語こそが詩の特権だと言い換えられるのかもし

れません。伝達のために整理整頓された理性の言葉よりも、言葉自体の持つイメージや自動性に身をゆだねた表現のほうに私たちの心が動くのはなぜか。言葉の向こう側にはたったひとりの人がいるから、そして誰でもないひとりを通して言葉そのものの手触りを知りなおすことができるからだと思っています。「うたは／あなたによまれているよ」の呼びかけを胸にこだまさせながら、あたらしい詩にであえたよろこびに満ちつつ。